

しもかけ よせじま 下懸・寄島遺跡発掘調査通信

発行 2017. 2. 16

■遺跡の概要

下懸遺跡と寄島遺跡は、ともに碧南台地の東縁部に沿って流れる鹿乗川左岸に展開する沖積地の自然堤防に立地しています。その標高は約 6.7～7.0m です。

寄島遺跡は平成 19 年度から平成 26 年度にかけて調査を行っています。平成 19 年度調査では古墳時代初頭を中心とする時期の集落(居住域)とその南側で方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼや古墳の周溝しゅうこうと考えられる溝、平成 23 年度調査では方墳(もしくは前方後方墳)の周溝・方形周溝墓・竪穴建物・自然流路(川跡)などが検出されています。このうち最も南側で検出された自然流路(003NR)からは多量の土器・木製品(建築部材)が出土しています。

下懸遺跡は平成 12 年度調査に大規模な調査を行っています。弥生時代末から古墳時代初頭に最盛期となる集落と方形周溝墓群で構成される墓域が確認できたほか、遺跡南端の谷からは奈良時代以降の多量の木製品のほか、三河地方で初の木簡もっかんが出土しており、周辺に古代の公的な施設の存在が想定されています。これらの成果から鹿乗川の旧流路沿いの自然堤防上に同時期ないし近接した時期に多数の集落が存在していたことが判明しています。

■調査成果

今回の発掘調査地点は下懸遺跡と寄島遺跡の範囲にまたがっています。そのため、鹿乗川に架かる下懸橋(現在、解体中)を境界として便宜的に北側を寄島遺跡、南側を下懸遺跡としました。調査は 720 m²を対象として、平成 29 年 1 月 17 日から発掘調査を開始し、2 月 3 日に終了しています。

調査の結果、調査区全体が自然流路(001NR)の一部であることが判明しました。遺物は上層に山茶碗やまちゃわん(中世の日用雑器)、流路南岸付近の植物質腐食土層では弥生時代末から古墳時代初頭の多量の土器(壺・甕・高坏・器台つぼ かめ たかつき きだい)、底面付近の粗砂混シルト層からは建築部材と推測される木製品が出土しています。これら遺物の時期や出土状況、流路が埋没した様相を観察すると、寄島遺跡平成 23 年度調査で検出された自然流路(003NR)と非常に良く似ていることが分かりました。さらに位置関係も 003NR の下流に位置していることから、これらは同一の自然流路であると推測ができます。

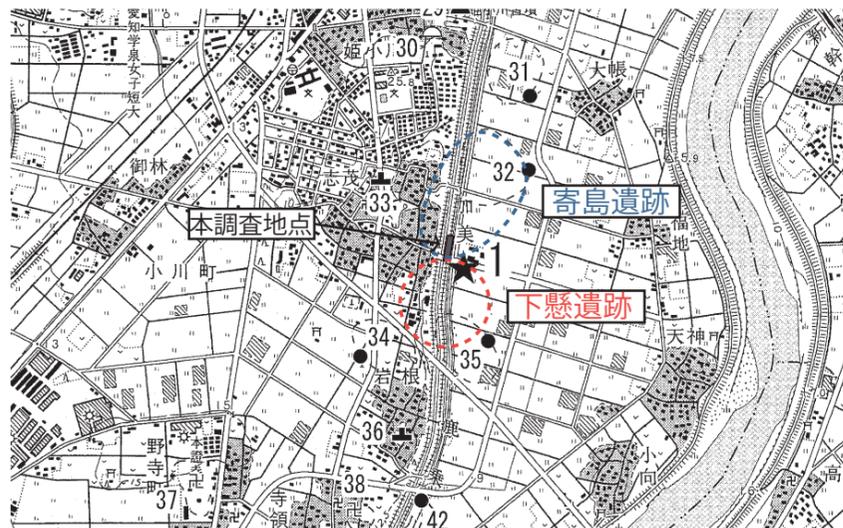
今回の調査によって、下懸遺跡と寄島遺跡の様相の一端を垣間見ることができたほか、過去の調査成果を関連づけることができる成果が得られました。今後、出土遺物等の整理作業を行っていきませんが、その進展によって現場段階では分からなかった新しい発見あるかもしれません。どうぞご期待ください。

【引用参考文献】 2012 愛知県埋蔵文化財センター 「年報 平成 23 年度」

2009 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 144 集 下懸遺跡」

発注者：(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

施工者：株式会社アート 愛知支店



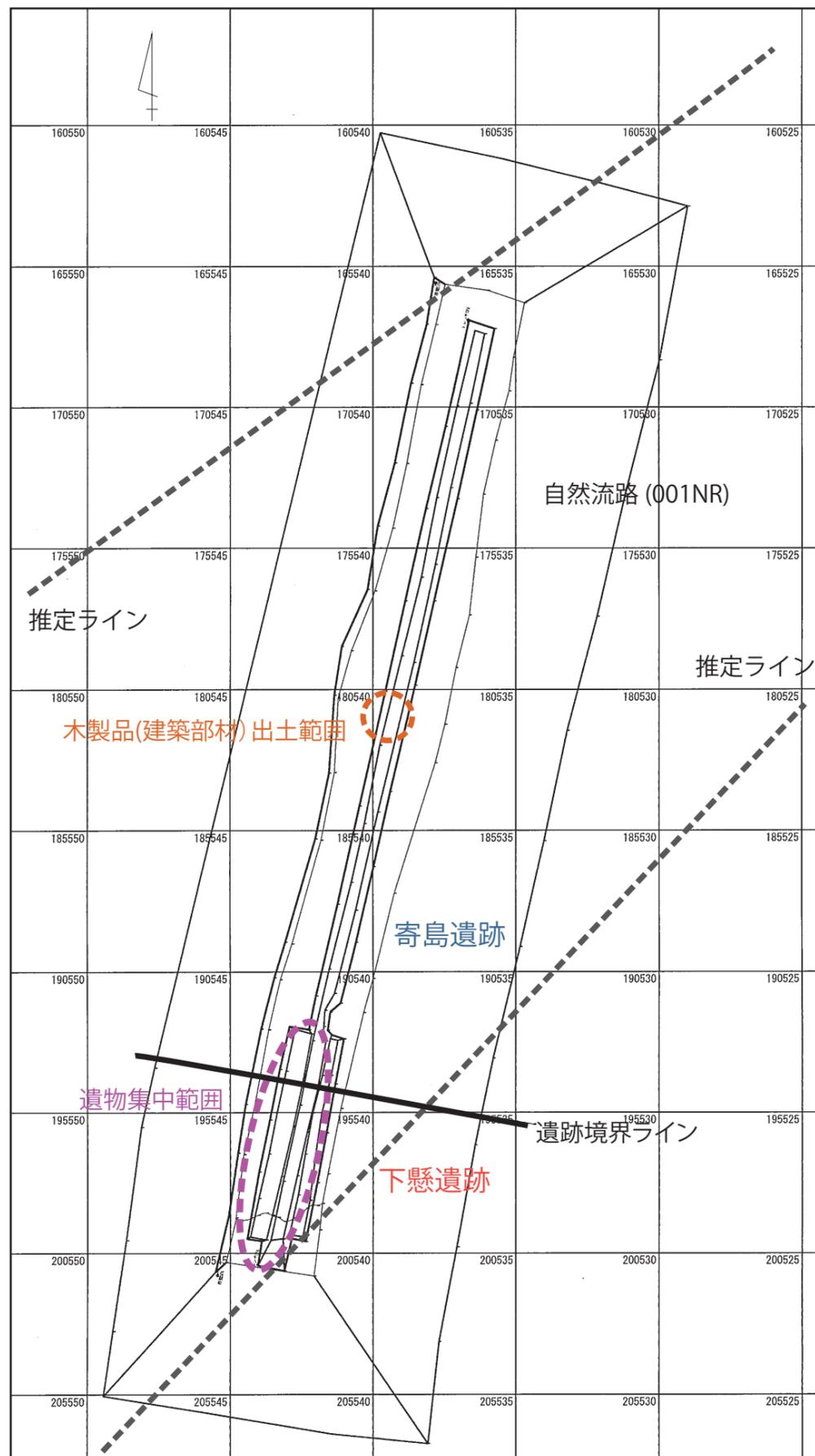
調査地点位置図 (S=1 : 25,000)



調査地点遠景 (南西から)



自然流路土層断面 (南東から)



調査区全体図 (S=1 : 200)



木製品出土状況 (北西から)



土器出土状況 (南西から)



壺



器台



高坏



甕